

知 覧

栗 山 恵 美

七十年経てなほ深きかなしみを抱き特攻記念館あり

壁一面の遺影のまなざしは穏やかに且つ峻烈にわれらを見詰む

少年兵の笑みは何かを語りをり自ら志願すと遺書にはあれど

送らるる兵も小旗をうち振りて見送る女学生も面輪稚し

うからへの思ひを綴る遺書あまた時間かけて読む胸に迫るを

記念館に置かれしノートに若者は「崇高なる死」と記して去りぬ

海底より戻りし零戦錆浮かせ展示されあり玩具のやうに

遠き空を仰ぎて母の像は佇つ戦時の日本の母の姿に

若きらは特攻機より俯瞰して征きしか知覧の茶畑続く

最後の夜に如何なるゆめをむすびしや三角兵舎に初夏の陽は照る